特67
400

和歌初學

卷之貳

東京帝國大學圖書之印

和歌初學卷乃貳

前卷歌題と歌

◉新年

去年といへは久しくなれる心地してれもへはよはのへたてなりけり

解

「去年」は「こゞ」とよむべし

此歌の第一句「こゞといへば」は六文字にて一字多し、是れ即ち字餘りの句なり、一首の中に、字餘の句ある時は、卅一字以上とある也、字餘の句の中には「あいうれ」の中の文字、必らず入れり、「けさにあけて」「月はいでにけり」「武庫のうらや」「名にしれはゞ」等の句を見てしるべし、又あいうれの文字、入らずとも僅に間ゆる時は、字餘となりても差支なし、たとへは「辭に立てゝ」「昔きゝにし」などの如し

〔二〕けさにあけて思へはあやしきのふまで何をいろきし心あるらん

〔三〕皆人のをしむにとまる年ならばうれしきけふにあはさらましを

〔解〕「をしむ」は「おしむ」と書くべからず、是れ假字遣なり、歌を習ふ者は、必らず心得へき事なり、聲はこゑの假字、聞はきこゑなり、此の外「い」「ゐ」「ひ」又「じ」「ぢ」或は「は」「わ」等の區別は、卷を重ぬるにつれ、知ることをゐん

〔四〕けさみれはのきのしめなはかとの松住みふるしたるやどとしもなし

〔五〕のとけしとれもひなさるこころろきのふにかはるしるしなりけれ

〔解〕第三句に「心てろ」と「てろ」を上に置て、第五句しるしなりけれと「けれ」にて結ふなり、「已かまくにや生ひしけるらん」といふ句は、「や」といふ疑ひの詞上にある故に、下を「らん」と、矢張疑ひ詞にて結ふなり、又上に「ぞ」といふ、たしかめし詞有時は、下を「ける」といふ詞にて結ふなり、假令は「花ぞちりける」の如し、之を「てにをは」といふなり、「てにをはも」、歌よむ人の、心得べき事なり、されと斯る事は、多く人の歌をよむ内に、終に口傳となり、自然に備はるものなり、終卷に詳述せん

〔六〕松のはのかはらぬいろもめつらしき年のはしめになりにけるかな

〔七〕さくはなのかけにくむよりたのしきい年のはしめの酒宴也けり

〔解〕酒宴は「うたげ」とよむなり、是れ雅言にして、所謂大和詞なり、歌よむに必用の俗語を、雅言に直して示すは、卷の十一なり

● 立春

〔一〕うなゐ子の昔に似たるうれしさは年のはしめのこころなりけり

〔二〕山見れは霞てめたりうみゝれはなみしつかなりはるやたつらん

〔三〕をちこちの山のゝ雪もかすむなりけさより春になりにけらしも

〔解〕「山のみ雪」と雪にみの字を添ふるは、別て意味あるにあらず、只優にきこゑさせんが爲のみ、「三冬つき」「手折てを來ん」など例は多し

〔四〕春たつときくつるからに春日山きえぬゆきのはなと見ゆらん

〔解〕春日山は大和の國にあり、此の如き名所は、何處にてもよろしとは行かず大概昔其處にて、歌よみ之例のある處を用ふべし、名所一覽も終卷に揭くべし

〔五〕冬すきて春しきぬれはとし月はあらたまれとも人はふりゆく

◉初春〔早春〕

〔一〕ふるゆきもうくひすのねもはるくれはうちとけやすきものにろ有ける

〔二〕冬枯のやなきゆるかしふくかせのけさは春にもなりにけるかな

〔三〕かれなから立てるやなきにふくかせもはるめき渡るむさしの〻原

〔四〕彼の見ゆるたかねの雪はきえなくに霞わたりてはるはきにけり

〔五〕ゆきはきえ氷はとけし澤水にうかぶはあさきはるのいろかな

◉若菜

〔一〕家に居てれもひしよりは岡のべのゆきまのわかな多くもあるかな

〔二〕ふみわけて人のつむらんけふをこそわかなもゆきの下にまつらめ

〔三〕つみたむる事のかたさはうくひすのてゑするのべのわかなこりけり

〔四〕のべにいてわかなつまんといふ日よりはるのこころはうてきろめけり

〔五〕としをしつまぬことなくつむものはよはひのかすとわかなこりけり

〔六〕ふめはきえきゆれはつみて春の野のゆきもわかなものこらさりけり

◉霞

〔一〕田子の浦霞のふかくみゆるかなもしほの烟たちやろふらん

〔二〕はるくれはと山のかすみたちこめてけふりたえゆく小野のすみかま

〔三〕ふしのねのゆきにさしたるあさひかけはゆからぬやかすみなるらん

〔四〕春の日にゐなのを行けはありまやまありとも見えすたつかすみかな

◉鶯

〔一〕花れうき片山里のうくひすやわれは顔にもはるを告つらん
〔二〕はるたてははなとやみらんしらゆきのかくれる枝にうぐひすのなく
〔三〕よの中のうきもつらきもうくひすのこゑをしきけは忘られにけり
〔四〕はなみんと植しのきはのうめかゑに思のほかのうくひすのこゑ
〔五〕うくひすのなくはつこゑのうれしさに獨起するあさほらけかな
〔六〕うくひすのこゑなかりせはゆきゝゑぬやまさといかではるをしらまし
〔七〕いつのまに香をしたひきてうくひすのけさくうめのゑだになくらん

◉ 殘雪

〔一〕わかやどのかねにのこるしらゆきのふかきやはるのあさきなるらん
〔二〕忘れてはくなかとぞれもふ山のはにはるもひをへてのこるしらゆき
〔三〕めつらしとみろむるほどになりにけり遠山のはにのこるしらゆき
〔四〕あずよりはわかなつむ子のこゑやせん門田のゆきはまみゑにけり

〔五〕きのふけふふりしはきゑてなかくにころのゆきのみ殘るのへかな

歌は只だ徒よよみ捨つるは口惜し、一首々々に、よく心をとめ、よく讀み味ふし、一首よく覺ゆれば、之を基として十首も廿首も、よみゑらるゝものなり、歌學び程、世に易きはなし、たとへは、立春の二の歌にならひて

山みれはもくれろめたり海みれは浪風あらし冬やきつらん

といへは初冬の歌となる、又若菜の一にならひて

家に居てれもひしよりは深山べの岩間のわらび多くもあるかな

といへは蕨の歌となる、又鶯の三にならひ

世の中のうきもつらきもしきしまのうたをしよめは忘られにけり

とよむか如し、

〔注　意〕本書購讀者は、如何なる歌にても、無料添削を受くる事を得、但返送料は添へ

◉春雪　はるのゆき

説　明　春になりて、ふる雪をいふ、きえやすき意などよめり、殘雪と混ずへからず

意　想

〔一〕春になつてからも、またふるゆきは、梅のはなか、さいたと思ふ程もなく、ちるのかとれもふ

〔二〕風かさえて、まだ寒い故に、埋み火のあたりを、離れずに居れは、春のやうでもなく、其處まで、雪かふき入る

◉餘寒　のこりのさむさ

説　明　春になりても、まだ寒きよしをも、又去年より、引つき寒きよしをも、よめり

意　想

〔一〕せりつみに、ゆきし野の水か、風かさにてさむき故に、またもとの氷にかへる樣な、塞空であるワイ

〔二〕ふもとには、はるのけしきの見えなからして、まだ雪かさゆる、三吉野の山

〔三〕若くさは、もえいでたか、風寒くして、野中の清水は、ぬるむ日もない

◉梅　うめ　若木の梅　老木の梅　一木の梅

説　明　年の内より、さき初ること、又春の日、萬の花に先ちて匂ふ事、及ひ鶯、霞月、雪などに、よみ合せたり

意　想

〔一〕枯れ果てし、ものと思ひ定めし、梅であるのを、れもはぬ枝に、花々咲いた

〔二〕遠方よも近方にも、うくひすの聲かする、總て梅の盛であらう

〔三〕うめの花を、初めて見たものならば、枯れ木に花がさくと、いひてさわくであらう

◉柳　やなぎ　青やぎ　糸やなぎ　しだり柳

説　明　綠なる色を賞し、又風になひき、雨に烟るさまなどよめり

〔一〕花でなくて、花の姿にも、花とらぬは、淺みどり色なる、青柳である
〔二〕春雨の、ふり初めしより、青柳の、糸の緑は、色かました

◉若草　わかくさ　春草　はるくさ

説明　二題とも通はしてよめり、春になりても芽出る小草をいふ、又霜かれし山べ、のべなどの、青みわたる樣などよめり

意想

〔一〕雪はまだ、きえはてしないのに、野邊ははや、うすみどりなる、はるの若草が生いてある

〔二〕若草の、萌え出で初めし、春の野は、散歩するのも、樂しい事である

◉蕨　わらび　さわらび　はつわらび

説明　野山岡などよ、もえ出る樣より、之を折ることをもよめり

意想

〔一〕柴人の、行く跡を栞に、昇りきて、山路のわらびを、手折つたワイ
〔二〕土産にするでもないに、只徒に、山里の行手に、萌え出でしわらひを、斯の樣につむ
〔三〕うくひすよさまたけられて、今日も又、岡のわらひを、折り殘した

◉春曙　はるのあけぼの

説明　曙は、曉の後にて、物色なほ少し見えわむる頃也、和いつはあれど、春の曙、の空ほどの景色はなし、花、鳥、霞など取合せて、最も優によむべし

意想

〔一〕山のはしも、空も一つに、見えるワイ、之たを霞んだ所の、春のあけぼのゝけしきといふのであらう
〔二〕鶯の、聲はかり、、花蔭にまだ、人さへも來ぬ、あけぼのゝら

◉春月　はるのつき

説　明　れほろにかすむよし、霞又ハをいはでも、れほろなるよしにもよめり、或は秋の月より、あはれなる心など、よむもあり

意　想

〔一〕はるのよを、れぼろ月よといふことは、霞むといふの名でありませう

〔二〕柳の木の間に、かすんでみゑる月は、すだれでしにみるやうの、心地がする

◉春　雨　はるさめ　はるのあめ

説　明　春の長き日に、しめ〳〵と、物靜かにふるよしを、よめり、又花をもよふし草葉をめぐむよしをも、通はしてよむべし、春と雨とをわけても、又春といはずとも、春のものにはせて、よめるもあり

意　想

〔一〕降るとさへも、目にはみゑぬか、春雨のふる日に、引く琴の音が、しめつし聞ゑる

〔二〕巣にこもつて居る、雀のひなの、なく聲のほか、軒端に音のせぬ、春の雨

◉春　風　はるのかせ　はるかせ

説　明　春のはしめに、雪氷をふきとくことより、うめの香をさそひ、柳のいとを靡かせ、櫻のために、いたふなど、惣てはるのものによせて、よむべし

意　想

〔一〕花ひらを、一ひらもふき散らさぬ程の、靜なる春風は、なか〳〵、花の匂ひがする

〔二〕花さかりに、訪ひくる人の、道しるべをして、其家の主人らしくする、春の山風

〔花の頃、山里に住居する、心にて考ふべし〕

春　望　はるのなかめ

説　明　うらゝかにかすむ春の日、山べ野べ海原、其他いづてにあれ、遠く見渡した景色を、いかにものとかなるさまによむべし

意想

〔一〕見わたせば、柳や櫻を、こき交ぜて、都は春の錦の樣である

〔二〕なにはがたから、こぎだして、沖路を行く船が、霞の中に、モー這入いた

◉歸雁　かへるかり

説明　秋の中頃來し雁の、春花さく頃、北の方へ歸りゆくをいふ、北へかへるを、越路へかへる、常世へかへる、又玉つさをかけて行く、秋を契りて行くなどいへり、花を見捨てゝかへるを恨み、霞をわけて行く聲を、恨むよし杯よめり

意想

〔一〕秋つれてきた、數はしらぬが、昨日一連、今日は二つら、雁かかへつた

〔二〕行く辰の、姿はかりも見ようと思ふ、大ろらの霞を、ふきといてくれろ、春の山かせヨ

◉呼子鳥　よぶことり

説明　なく聲の、人をよぶに似たるより、名を負はしたるなり、此鳥今は、つまぶらかにしりがたし、

意想

〔一〕答へもしぬに、よびとめてはくれるな、呼子鳥ヨ、佐保の山べを、上り下りする其の度々

〔二〕遙なる、深山の杣で、斧をつかふ、其の音に、答をしてあく、よぶことり

◉春駒　はるのこまはるごまわかごまあらこまはなれこまたなれこま

説明　駒は子馬也、春くさのもゆるころ、のべ澤べなどに、放ち飼ふなり、春に駒のいさむ樣なをよむべし、又春と駒とを、別けてよむもあり、

意想

〔一〕春の野の、草はこのころ、もえ出でた、手飼の駒を、放ち遊つても、よろしきや

うに

〔二〕里の小見が、遊びあから、引き放つ、野かひの駒は、心地かよいやうである

◉ 雉 きじ きゝず

説 明 燒野に、子を思ひ妻を戀ふる、ことなどよめり、燒野とは、春野をやきたる其跡をいふなり

意 想

〔一〕櫻のさく、片山里の、暮に、二聲ないて、立つて行くきじ

〔二〕春の野べの、去年御狩しし跡を訪へば、妻のない雉のなくこゑがあはれである

◉ 雲雀 ひばり 夕雲雀

説 明 雲雀は、子を思ふ事、切なるものにして、空にあがりても、芝生の床の子を思ひ、又下りても、床にはなくことなし、又のどけき空に、たちあがりてなく、さまなどよめり

意 想

〔一〕今日もまた、空へ雲雀が、上つたワイ、ドンナに雲井の春は、長閑であるたらう

〔二〕母子草の、花のさくのべに、ちゝどなくひばりのこゑは、あはれである

◉ 花 はな

花といふ題に、櫻をよむべし、されと櫻といふ題にて、花とのみよむは、わろし、又落花もよむへからず

意 想

〔一〕其處と定めたでなく、只うかれて、家を出たのであるが、矢張り今日も、櫻の本にきた

〔二〕花といふ、花の中で、花の君とも、見るべきものは、我が日本の、櫻である

〔三〕三吉野の、よしのゝ山の、櫻の花を、雪かとばかり、見誤られた

◉ 落花 ちるはな

説　明　花のちるさまを、雪にまがへ、又さうひゆくかせを恨む、こゝろなどよむべし

意　想

〔一〕櫻の花か、道の見わぬ程、散てあるが、トーしたらよろしかロー、志賀の山越

〔二〕とふ鳥の、羽風もいとふ、花のねだを、あんまりつれなくも、ふく嵐であるワイ

〔三〕梢をふく風も、夕方はのどかであるから、數へる事が、できる樣に、ちる櫻

◉春　興　はるのあろひ　はるのすさび

説　明　花鳥にあくかれて、野山にあろふなど、春のあろひの、興あるさまをよむべし

意　想

〔一〕世の中に、うれしきものは、友人と、花を見てくらす時の心である

〔二〕大井川の、入江の松に、ふる雪は、嵐山のさくらである

◉野　遊　のあろひ　のべのあろひ

説　明　すみれつみ、つはなぬきなどして、春の長き日を、野べにあろぶさまを、れ

もしろくよむべし

意　想

〔一〕草をつんで、置きし處も忘れた、うかれなから行く、のべのあろひに

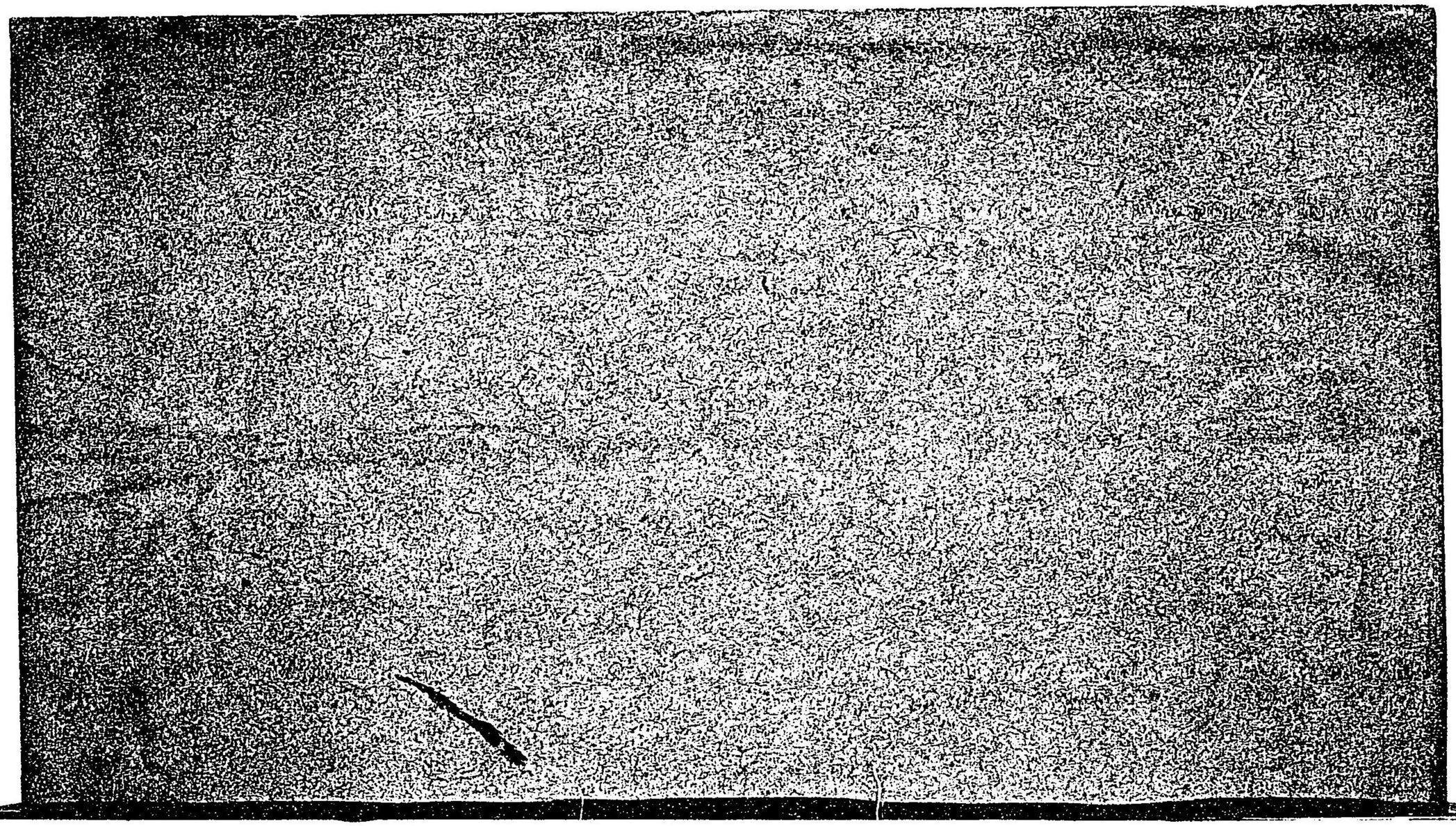
〔二〕今日も又、サーといはれて、幼子の心に隨ひて行く、春のゝべ

右廿題類語

すこもりの　かけだにもみん
猶埋火のあたりまで　なよひとめろ
ろゝろあるき　こゝちよげなる
するとはなしに　ろてとなく
いかゝはすべき　れもふとち

〔注意〕本書は、業務の餘暇を以て、習ふ者達に、教ふるを以て、目とするものなれは徒らに紙を費るを、目的とする書物と、同一視玉ふ勿れ、乞ふ讀者諸君、よく

讀み、よく添削を受け、一日も早く、歌の道に通曉し、畏多くも天皇陛下の許させ給ふ、歌御會初御題詠進に、敕撰の榮をねんことを、務められよ

明治二十九年六月十四日印刷
明治二十九年六月二十日發行　壹部郵送料共金拾錢

編輯者兼發行者　山梨縣甲府市稻門村百四十九番戸　田澤八十作
發行所　仝縣仝市仝村仝番戸　花廼舍吟社
印刷者　仝縣仝市相生町三十番戸　鍋田庫造
印刷所　仝縣仝市仝町仝番戸　鍋田活版所